

社会政策学における独創性の追求 非自覚的な独りよがりと公知の狭間

社会政策学会第142回大会<教育セッション>
査読に通る論文とは ——院生・若手研究者の心得と注意点——

2021年5月23日(日)11:30-12:45

小野塚 知 二 (東京大学・経済学研究科)

目次

- I 社会政策とは何か？
- II 独創性と先行研究と公知
- III 執筆者および査読者としての経験知
- IV 査読者への期待

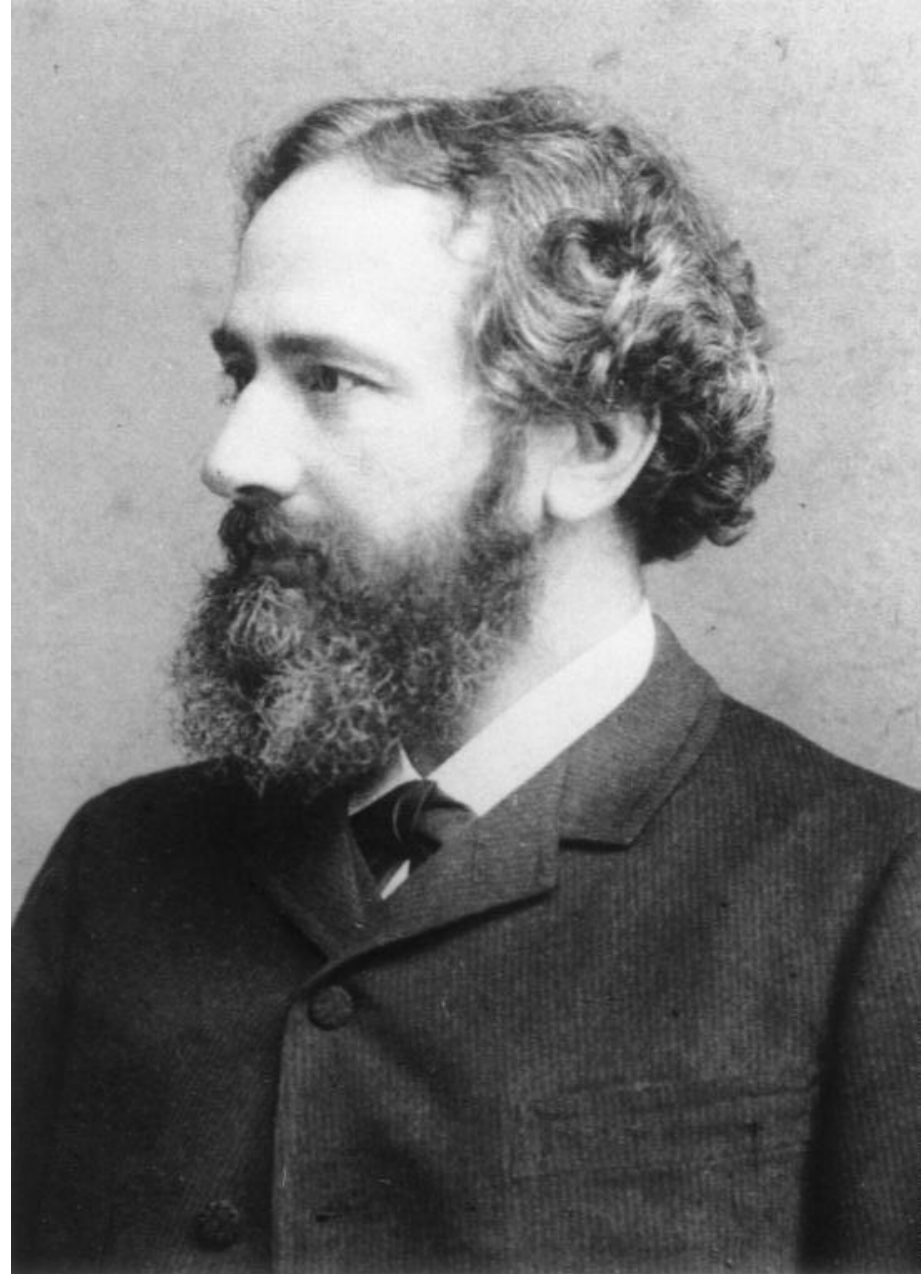
Schriften
des
Vereins für Socialpolitik.
"

I.
Über Reform
des
Actiengesellschaftswesens.



Leipzig,
Verlag von Dunder & Humblot.
1873.

Digitized by Google



ドイツ社会政策学会論集第1巻,1873年

Lujo Brentano im 1890.

I 社会政策とは何か？

1. 社会+政策：不思議な言葉

(1)「社会政策」とは不思議な言葉である。

個人・社会・国家の三層で、なぜ国家が社会に関する政策を行うのか？
そこで、「社会」とは何か？

Cf.かつての「社会工学(social engineering)」(東工大、筑波大)
現在の「公共政策」、「パートナーリズム」、「ナッジ」など
いずれも主体が不明の概念⇔「社会政策」

しかも、社会工学や公共政策での「社会」は、社会政策での「社会」とは異なり、全体社会(社会全体)を全体論的(holistic)に意味している。

I 社会政策とは何か？

2. 「社会政策」とはいかなる政策領域か？

- (1) 自由な(=身分制・共同体・財産・共通規範から自由な)人々の間の壊れそうな人間関係(=社会)を何らかの人為的・規範的な政策手段を用いて建て直し、社会から零れ落ちそうになる人を何らかのあるべき「社会=人間関係」に取り込み直そうとする政策。
- (2) 人間関係=社会を再建・再編することにより、近代市民社会・産業社会・資本主義に不可避の問題を解消しようとする政策体系。
- (3) 身分制・共同体・財産・共通規範からの自由が確立した近現代の市民社会・産業社会・資本主義社会に特有の政策領域。 Cf.「全体社会」を対象とする超歴史的な政策ではない。

I 社会政策とは何か？

2. 「社会政策」とはいかなる政策領域か？

- (4)ただし、社会政策は多くの場合、性別・年齢別・国籍別・言語(民族)別に区分されており、人を完全に普遍的(universalist)に社会に包摂する政策では必ずしもなかった。
- (5)社会政策は長い間、非普遍主義的(particularist)な色を濃く残していた政策領域である。
- (6)「社会的包摂(social inclusion)」の現代的意義：
植民地主義後(post-colonial)の移民・難民政策や教育政策も含めて、現在では、社会政策は少なくともたたえの上では普遍主義原理に変更しつつある。

I 社会政策とは何か？

3. 歴史の中の「社会政策」

(1)産業政策、農業政策、出入国管理政策、福祉政策などが現代(≒20世紀)に固有の産物である(それ以前にはこれらの政策はなかった)のに対し、社会政策は、市場経済の形式合理性が人の生(life)の実質合理性を脅かし始めた近世(16-18世紀)に起源があり、近現代(19世紀以降、現在まで)を特徴付ける最も重要な政策領域である。

社会政策を欠く近現代社会はありえない。ただし、後述のように、今後は社会政策を欠く「現代後(post-modern)」の社会になる可能性もある。オーウェル『1984年』や伊藤計劃『ハーモニー』の予感が現実化しつつある(殊に新型コロナ感染症蔓延以降)。

I 社会政策とは何か？

3. 歴史の中の「社会政策」

(2)ただし、現在は社会政策の大きな転換期。ことによると歴史的使命の終焉を迎えつつあるかもしれない。

(3)ITを駆使した即時監視・即時管理・即時統御が可能になれば、人間関係や社会関係は、少なくとも擬似的には(近現代社会が当然の規範として人権・自由などと齟齬するものの、監視・管理・統御による社会の「調和」は)構成可能だから、自由な諸個人と社会を繋ぎ合わせることを目的とした社会政策の出番はなくなるかもしれない。功利主義的統治の法哲学(安藤2007)は即時監視・即時管理の生政治を肯定する役割を果たしているし、そうした生政治は早くも2008年には伊藤計画によってリアルに予感されていた。生政治のコロナ下での「社会実装」と、中国のDigital Leninismへの驀進。

I 社会政策とは何か？

3. 歴史の中の「社会政策」

(4)いま社会政策の最前線/周縁にあるのは「社会的孤立」

「**社会的孤立**(social isolation)」という最も根源的な孤立(その象徴的な表現が**孤独死**)が問題化している状況。

Cf.宗教的孤立、地理的孤立、思想的孤立、政治的孤立。人間にとって、宗教や、他者との地理的距離や、思想や、政治(zoon politikon、城塞によって囲まれた都市に依拠しなければ生きえないことを運命付けられた政治的生物)を媒介にした人間関係よりも、それらすべてを包含し、さらに、それらには回収できない生(なま)の人間関係が最も根源的である。その人間関係すら希薄化し、生まれるときは決して独りではないのに、**死ぬときは独り**で、誰にも発見されない死体が、眼前の問題として認識されつつある。

I 社会政策とは何か？

3. 歴史の中の「社会政策」

(5) 20世紀にそれが発生した条件としての食糧の相対価格の低下。

かつては何らかの社会関係の中にいなければ、必要な食糧を調達できなかったのに、現在は、少なくとも先進諸国では、生物としての最低限を維持するに足る栄養を得るのに必要な食糧は、かつてなく安価であり、ほとんどあらゆる社会関係を剥奪された後も、ごくわずかの現金支出さえ可能なら生物学的な生命は維持できる。生存の主たる条件が社会関係から、コンビニ等でのチープフードを獲得できる現金支出に縮減されている。18-19世紀の産業化期の「自然の有限性」問題(マルサス的な人口問題)のリカード的な解決策が、市場向けに大量生産された少品種のチープフードの輸入であった。現在も食糧供給はリカードの「解決策」(他国の自然への依存(=食糧輸入))に加えて、過去の自然(化石燃料=化学肥料)に依存した増収効果)の延長上にあり、大規模大量生産された食材が長距離輸送されて、世界各地にチープフードとして出回っている。人間関係を剥奪された生物学的な生存の可能性と孤独死の背中合わせの関係。

I 社会政策とは何か？

4. 社会政策／社会政策学のいま

(1) 社会政策学とは、いまもっとも熱い学問領域だが、若い研究者の熱は冷めつつあるように思われる。人間関係の再構築はもはや技術的諸手段によって擬似的に可能だから社会政策の出番はほとんどないということなのか(社会政策の不必要化)、それとも、もはや人間関係を再構築するのは絶望的に困難であるという諦念が広範に共有されているのか(社会政策の不可能化)。社会政策と社会政策学双方の終焉を予感させるが、たとえ終わるとしても、どのように終わらせ、何を以て社会政策を継承させるのかを構想することは喫緊の課題。

(2) いま、社会政策学にはさまざまな多様性と独創性が可能。何でもありの状況。功利主義的統治や自由主義的優生学などまで何でも主張できる状況。

社會政策學會論叢

第一冊

工場法と労働問題

社會政策學會編纂 (同文館藏版)

第一回大會記事

一 工場法討議
一 講 演



『社会政策学会論叢』第1冊、1907年。

高野岩三郎一家(1910年頃)

Ⅱ 独創性と先行研究と公知

1. 人の思念の諸階梯

A 公知・公理：教科書を読んで、理解すればよい。

B 先行研究=公共財 ただし全分野の先行研究を知ることが事実上不可能だから自分に関係する先行研究を取捨選択して消化・吸収する。しかも、先行研究で当初の問いが解けてしまう(満足できる)なら、自分の研究は不要。

C さまざま独創性：①先行研究では解明されていなかったり、見落とされていたり、あるいは論争になっていたりすることについて、②学問の言葉で、③論理的かつ実証的に学問の作法にしたがって、表現された命題(群)：問いと答の関係。

D 思いつき、直感的本質把握、感性・情緒・勘による理解、非自覚的な独りよがり・思い込み、妄想：十分に言語化も論理化もされていない想念。しかし、これがすべての研究の出発点であり基盤である。⇒ここをいかに自覚し、言語化するか？

II 独創性と先行研究と公知

2. 感情と意思と理性の間の往還

理性・合理性 これを重視するのが主知主義(intellectualism)

意思・思想・規範 これを重視するのが主意主義(voluntarism)

感情・情緒・身体感覚 これを重視するのが主情主義(emotionalism)

(1)研究は感情(よくない、まずい、好き嫌い、これでは駄目、危ない、やばい等々)から始まる。それは意思を通じて、最後は、しかし必ず理性の言葉で表現されなければならない。そのための近道が先行研究との格闘であり、先行研究の弱点の追及である。しかし、格闘や追及の原動力は情緒や意思に発する。理性はそのための道具に過ぎない。

(2)だが、道具を適切に使いこなせなければ、学問の世界では何も認めてもらえない(そういう意味で学問とは人でなしで、非人間的な業である)。「こう感ずる」、「こう思う」のは学問の土台として非常に大切だが、それだけでは学問の入り口にすらならない。理性の言葉(理性も言葉も“logos”)に翻訳し、適切に問題を立て、適切に答えることが重要。

Ⅱ 独創性と先行研究と公知

3. おのれの感情や思想を包み隠そうとする心

(1)自分の思い込みを露わにするのを躊躇うことの悪弊

他人の言葉で表現できることなら、それは本当の自分の独創性ではない。官公庁・自治体や一部の研究者が用いる意味の曖昧なカタカナ語に無自覚に依存しているだけでは、いい論文にならない。自分の感性と意思と理性とで十分に研がれた言葉で、自分の言いたいことの真髄を簡潔に表現しなければならない。

(2)「先行研究に則って仮に～と設定した場合に、論理的・実証的な考察の結果、〇〇の結論が導出できる」

これは一見すると自分の思い込み(ナマの主観)の偏りを免れているようだが、実は、仮説を立て、それを何らかの材料と方法とで検証しようとしている時点で、主観の判断と選択を免れていない。己の思い込みを消し去ろうとするのは有害無益。むしろ、それを可能な限り、明晰に表現するのが研究の第一歩である。

Ⅱ 独創性と先行研究と公知

4. 非自覚的な独りよがり

(1)自分が知っている／解っている／考えていること(=独創性の種)を読者は知らないことがわかっていない

自分では当然と思っていることでも、きちんと説明しないと、(査)読者は、筆者がそれについて本当に分かって書いているのか否か判断できない。基本的な心構えとして学部¹の1～2年生(専門課程に入る前の学生)に分かるように説明しないといけない。他分野の媒体や多分野にまたがる媒体に書く場合には、それを高校生レベルにしなければいけない。

(2)そこまで、解りやすくして初めて、自力で到達した独創性の本質が表現できる。

II 独創性と先行研究と公知

5. 先行研究

(1) 大概のことは先行研究が論じている

新しい対象・事例だから、先行研究がないなどと考えるのは、まったく愚かである。社会政策は短くとも250年間(長めに取りなら近世以来約600年の)の歴史、社会政策学も150年の歴史があり、その間に**大概のことは論じられてきた**(知らなかったのなら、それは単に不勉強なのか、忘れ去られているだけ)。

(2) 人間も社会もそれほど変わらない

人間は十万年前からほとんど変わっていないし、社会の基本的な骨格や性格についての知識も2500年ほど前(プラトン、アリストテレス、お釈迦様、孔子の頃)には完成している。あとは同工異曲の繰り返し。「論語読みの論語知らず」以前の単なる不勉強は恥ずかしい。

II 独創性と先行研究と公知

(3) 先行研究に対峙する独創性とは何か？

- ① 単なる事例報告や単なる統計的処理を超えていること＝問いと答の関係が明示的であること。
- ② 自分の問いと答が、社会政策の本質である人間関係の再構成と社会への再包摂(を言語的・論理的(logical)に再構成し、分析し、総合する学知の体系⇒ I 参照)にいかに関わっているのかを、一つの事例の中から、単なる回帰分析を超えて、切り出してみせること。

(4) 先行研究を乗り越える＝先行研究に喧嘩を売る

- ① 先行研究を読み込んで、その成果を踏まえることはもちろん大切だが、それだけでは単なるお勉強。
- ② 先行研究を乗り越えるほどの独創性とは、どこかで、先行研究に啖呵を切って、喧嘩を売って、読者の眼前で、その喧嘩に勝ってみせることである。



社 會 政 策 學 會 第 一 回 大 會 參 會 列 會 員

Ⅲ 執筆者および査読者としての経験知

1. 課題設定の甘さ

- (1) 課題とは解きうる問いを意味する。解けるか否かは、問いを解くうえで適切な材料と方法の有無に依存する。
- (2) 「～について考察する」「～を実証する」「～を分析する」だけでは、問いになっていない。
- (3) その論文の考察・検証の対象や分析対象(「～」)が不明瞭であり、課題設定の甘さ・緩さを露呈していると読まれる。仮説検証(abduction)型なのなら、検証さるべき仮説とその学問的な意味を明瞭に提示しなければならない。
- (4) 課題設定が甘いと、本論や結論におもしろい部分があっても、全体の評価(問いから答にいたる関係)は低くなる。
- (5) 課題を最初に確定してしまいうのではなく、結論が概ね決まってから、改めて考えて書き直す。

Ⅲ 執筆者および査読者としての経験知

2. 論題の重要性

- (1) 論題は、論文の顔である。しかし、化粧もせず、表情も険しいまま、人前に出てくるような感じの論題が結構多い。
- (2) 一つは実に簡潔で、論文の特色も長所も全然表現されていない、そっけない論題である。もっと自分の魅力をさりげなく主張する方が良い。
- (3) もう一つは、いやに長々と、主題と副題で、説明調・詰問調の「なぜ、□□は〇〇なのか？：～～と……の比較を通じた△△からの考察」といった)感じで、一見して、何がどのように主張されている論文なのか、わからないもどかしさがある長すぎる論題。
- (4) 人の目を惹く魅力的な言葉で、論文の良いところを表現する努力を投稿直前まで諦めずに続けてほしい。 論題は最後に決める。

Ⅲ 執筆者および査読者としての経験知

3. 統計を使う際の注意

- (1) 統計は事実の自動的な反映ではなく、誰かの意図が介在している数字である(=つまり、他の記述資料とまったく同じで、誰かが作成したものである)ことを、十分に自覚し、その統計がなぜ取られ、なぜ残されているのかをよく考えてほしい。
- (2) 統計の意図がわかると、その使い方も注意深くなるはずだし、いろいろなことを読み取ることができるようになる。
- (3) 連続量か、離散量か？
- (4) 主観的確率か、計測結果か？
- (5) 検定はパラメトリックか、ノンパラメトリックか？(←母集団は何らかの既知の分布にしたがっているか？)
- (6) どの水準で相関は有意か？
- (7) 異常値はないか？

Ⅲ 執筆者および査読者としての経験知

4. 起源と経緯への頓着

- (1)何事にも起源(origins)がある(原稿には期限がある!)。起源を無視して、いま観察されたことだけを考えても、いまの特徴すら、効率的には解明できない。起源に遡って考えるのは、回り道のように見えて、思考の節約である。
- (2)起源は何段階に分かれていることもしばしばある。大概のことは少なくとも人類誕生までは遡れる。
- (3)その論文の課題設定次第で、起源をどこまで遡るべきか、適切に設定しないと、全員が歴史研究者になってしまう。
- (4)起源と現状との間を繋ぐ経緯(process, details, circumstances, etc.)が、その論文にとって意味があるなら、経緯も明示的な文章で押さえておいた方がよい。
- (5)起源と現状との比較だけで足りるなら、くどくどと経緯まで踏み込む必要はない。

Ⅲ 執筆者および査読者としての経験知

5. 外国語の概念(殊にカナ表記)

—いわゆる「カタカナ狩り」「原語狩り」について—

- (1) カナ表記・原語表記は、「他人の言葉」なので、徹底的に廃して、可能な限り和訳し、またどうしても訳出できない場合は日本語でしかるべき注を付すなど、意味や指示対象のあやふやな外国語(殊に英語)の術語をそのまま日本語の論文の中に紛れ込ませないようにすることが非常に大切である。
- (2) 「よく知っている英単語」だから、カタカナで表記してもよいということは全然ない。高校生や高齢者が読んでもわかる日本語で書くのが正攻法である。
- (3) 近年は責任逃れのための意味の曖昧化や、印象操作のために、カタカナ語が氾濫する悪弊があるが、研究者がそれに呑み込まれてはいけないので、官庁用語には特に注意が必要。

IV 査読者への期待

査読者の陥りやすい問題

査読者も人間なので万能・無謬ではない。

- (1) Aと解釈するか、Bと解釈するか、選択の余地の残されている問題について、この論文はB説を唱えていて、A説でないから駄目だという審査はしてはならない。Aの可能性がありうることを示唆することはできるが、自説とは異なることを学問的に主張しうる可能性にはできる限り寛容でなければならない。
- (2) どこが、どのように改善されないと掲載可にはならないのかを明晰に指示すべきであって、単に「改善が望まれる」とか「よりよい表現が望ましい」といった抽象的な意見は書くべきではない。もし、そうとしか書けないほどに改善の余地がない論文ならば、再投稿を期待するのではなく、単純な返却とすべきである。査読者の仕事の一つは、論文執筆に不向きな人に早めに引導を渡すことである。